



竹千代賞

叫べ、演劇部

森 本 菜々海

「本校の演劇部は廃部です。」
15回目の夏の日、校長先生に廃部を言い渡された。

受け入れられない。

元女子校の本校。高校設立時から百年続いた演劇部が廃部なんて。

入学した時、演劇部の公演を観た。本当に本当に面白くて私も一緒に、この憧れの掛け合いに参加したいと思った。

しかし高校1年の秋、演劇部は一人になり、教員不足で顧問をつけられなくなった結果、廃部になるらしい。先輩達はもう辞めてもいいんだと言って言う。同級生の部員達も辞めたい、一緒に辞めようと言って言う。演劇は一人ではできない。人と人が織りなす模様だから。

演劇は波長を合わす競技だ。息と一緒に吸い、一緒に吐くことこそが大切。雑音をなるべくなくす作業。

一人じゃ、それもできない。

でも、それはチャンスではないのか。一人だからこそ、波長を合わすなんて必要ない。雑音がなくてうるさくない。

それは、きっと好きなだけ 間 を取れるということ。

「ヴ——」

上映前のブザーが私を呼んでる。私は幕が上がる前に、幕の裏にいなきゃいけない。

一人も客席にいらなくても、ブザーが私を呼んでるから。

劇が始まったら、私はわたしでなくなる。わたしが私でいられないのだ。

ライトが当たる限り、私でいるのをやめる。

私は舞台上のわたしじゃない私が好き。みんな、私のことを注目している。そして、みんなの手の届かない存在になれる。

舞台上で一番意識しなければならぬのはわかりやすさでもなく、可愛さでもなく

間だ。

間を取ることで観客は舞台に釘付けになる。

うるさく騒ぐよりもずっといい。衣装もキラキラで輝いているけど私が一番輝いている。ダイヤはライトで反射して輝くけど、発光する私は反射なしで輝く。

これだから、演劇部員は演劇が辞められない。



高校設立、約百年前からある演劇部。

戦前から存続してきた演劇部、繋いだ部室。

一人には大きい大きい、部室。

一人には大きい大きい、学園祭。

一人には大きすぎる、責任。

私には大きすぎる壁。

私は小さい、声が小さい、体が小さい、志が小さい。

一人は辛い。

絶対一人じゃ演劇なんかできっこない。

実はこの学校には幻の校歌がある。

1番、2番は体育祭でも学年集会でも歌うのに、それでも3番は絶対に歌わない。

3番がいちばん大事なのに。この校歌を作った人のいちばん言いたいことが書かれているのに。でも生徒達は3番があることすら知らない。

あるいは、どうでもいいと思っている。

そうやって演劇部もないものとされてしまうのだろうか。

校歌の3番には

「浦の松原高く、舞い登りけむ人のごと」と書かれている。

この歌詞からも百年も前の生徒達の声が聞こえてくる。

浦の松原とは、きっと三保の松原のことだろう。松原は本校とともに育ってきた。きっとその気持ち在校歌

にも表れている。

やはり本校の演劇部は、ずっとずっと前から植えられてきた松の木なのだ。だから、その松の木を私の代で切られるわけにはいかない。

松の木を育てたいんだ。

松の木の年輪のように、部室にある衣装からも昔の演劇部員一人ひとりの熱い想いが伝わってくる。

衣装たちから聞こえる、絶対にこの大会に優勝しよう、絶対にこの演劇部を静岡一の演劇部にしようって。

それは校歌から衣装からも、演劇を辞めないでと言っている先輩たちの魂を感じる。演劇部は一人、けれどこんなに力強い先輩たちの魂とともに舞台に立てるから一人でもできる気がした。

私、演劇が好き。この清水が好き。この静岡が好き。

方言が優しい響きがして好き。いつもの馴染みの場所が好き。

この気持ちだけは静岡一大きいんだ、量産しない良さがある。

清水の海が向こうで私を励ましている。

静岡の山に私の心がこだまする。

演劇部がある「今」で時間が止まってしまえばいい。

叫ぶんだ、

私のどうしようもない気持ちを。

叫ぶんだ、

このどうしようもない廃部を。



そう叫ぶために一人でも演劇を続けた。

一人演劇を始めた。覚悟を決めた。

静岡一の一人演劇部になって伝えたいことがある。母校の良さ、静岡の良さを演劇で日本中に伝えるんだ。だから、ここに残り続けたい。私はどこにも行きたくない。この地元、静岡を愛し、演劇部を守り続けたい。そして、この百年の時を継いできた演劇部を未来に残し続けたい。

私はもう高校2年生、次の公演がラストチャンス。優勝してこの演劇部の名を残さなきゃ。演劇部にいたかったけど、あと1年しかいない。

本校の演劇部の名を16回目の秋に刻もう。

一人演劇部だろうと、この清水で叫び続ける。

あがけ、あがけ、ばかあがけ。